

● 日本の主な火山活動

口永良部島の新岳では、6 月 19 日の噴火以降、噴火は観測されていない。

火山性地震は少ない状態で経過した。火山性微動は観測されていない。

二酸化硫黄放出量はやや少ない状況であった。

地殻変動観測では、5 月 29 日の噴火以降に特段の変化は認められない。

火山活動が高まる傾向はみられないことから、5 月 29 日と同程度の噴火が発生する可能性は低くなっているものと考えられる。しかしながら、5 月 29 日の噴火前にみられた島の隆起が維持されていることから、引き続き噴火の可能性があり、火砕流にも警戒が必要と考えられる。

このことから、21 日 18 時 00 分に噴火警戒レベル 5（避難）を切替えた。

火砕流の流下による影響が及ぶと予想される屋久島町口永良部島の居住地域（前田地区、向江浜地区）では厳重な警戒（避難等の対応）が必要である。

噴火に伴う大きな噴石の飛散が予想される新岳火口から概ね 2 km の範囲、及び火砕流の流下による影響が及ぶと予想される新岳火口の西側の概ね 2.5 km の範囲では、厳重な警戒（避難等の対応）が必要である。新岳火口から半径 1.4 海里以内の周辺海域では、噴火による影響が及ぶ恐れがあるので、噴火に警戒が必要である。

桜島では低調な火山活動となっているが、これまでも繰り返し噴火活動が続いており、長期的な始良カルデラの膨張が認められる。このため、今後も活発な噴火活動が継続すると考えられるので、今後の火山活動の推移に注意が必要である。

昭和火口及び南岳山頂火口から概ね 2 km の範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石及び火砕流に警戒が必要である。

阿蘇山の中岳第一火口では、23 日 02 時 59 分と 06 時 02 分に小規模な噴火が発生した。02 時 59 分の噴火では、噴煙が火口縁上 1,400m まで上がり、火口周辺に大きな噴石が飛散するのを確認した。06 時 02 分の噴火では、噴煙が火口縁上 1,600m まで上がった。

中岳第一火口では、活発な火山活動が続いており、当分の間は 9 月 14 日と同程度の噴火が発生する可能性がある。

火口から概ね 2 km の範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石及び火砕流に警戒が必要である。風下側では火山灰だけでなく小さな噴石が風に流されて降るため注意が必要である。

西之島では、海上保安庁等の観測によると、噴火による噴石等の堆積や溶岩の流出が継続している。

西之島では、今後も新たに形成された陸地にある火口で噴火活動が継続すると考えられる。また、西之島周辺の海底で噴火が発生する可能性も引き続き考えられ、噴火による影響が海上まで及んだ場合、弾道を描いて飛散する大きな噴石や、水面を高速で広がるベースサージ等の影響が概ね 2 km の範囲に及ぶ恐れがあるので、西之島の中心から概ね 4 km 以内では噴火に警戒が必要である。

雌阿寒岳では、1 日に実施した現地調査及び上空からの観測（海上保安庁の協力による）により、今年 7 月の現地調査と比較してポンマチネシリ第 4 火口の火口壁における地熱域のわずかな拡大や、96-1 火口の噴煙の勢いの増大を確認した。全磁力連続観測では、ポンマチネシリ 96-1 火口近傍の地下における熱活動の活発化の可能性を示す全磁力の変化が継続している。

ポンマチネシリ火口付近の浅いところを震源とする微小な火山性地震は、8 月下旬以降少ない状態で経過している。

ポンマチネシリ火口から約 500m の範囲では、ごく小さな噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石に警戒が必要である。

吾妻山では、大穴火口からの噴気活動はやや活発な状態が続いている。

11 日から 12 日にかけて実施した現地調査では、大穴火口内及びその周辺で 2013 年以降拡大がみられている地熱域を引き続き確認した。また、14 日から 15 日にかけて大穴火口周辺で実施した全磁力繰り返し観測では、大穴火口周辺の地下での熱活動が活発化している可能性が考えられるデータを引き続き観測した。

大穴火口付近では小規模な噴火が発生する可能性があるため、大穴火口周辺（火口から概ね 500m の

範囲）では弾道を描いて飛散する大きな噴石に警戒が必要である。

草津白根山では、9 月 29 日から 10 月 2 日にかけて実施した現地調査及び 13 日の上空からの観測（陸上自衛隊東部方面航空隊の協力による）で、湯釜火口内北東部や北壁及び水釜火口の北から北東側にあたる斜面で熱活動の活発な状態の継続と北側噴気地帯で噴気活動が活発化しているのが認められた。また、東京工業大学によると、北側噴気地帯のガス組成及び湯釜湖水の化学成分に火山活動の活発化を示す変化が継続している。

湯釜火口から概ね 1 km の範囲では、小規模な噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石に警戒が必要である。

浅間山では、6 月 19 日の噴火以降、噴火は観測されていない。

山頂直下のごく浅い所を震源とする体に感じない火山性地震は多い状態が続いている。また、二酸化硫黄の放出量も多い状態で経過しており、引き続き火山活動はやや高まった状態で経過している。

14 日に実施した上空からの観測（陸上自衛隊東部方面航空隊の協力による）では、山頂火口内の火口底中央部及びその周辺に高温領域が引き続き認められた。

今後も火口周辺に影響を及ぼす小規模な噴火が発生する可能性があるので、山頂火口から概ね 2 km の範囲では、弾道を描いて飛散する大きな噴石に警戒が必要である。

御嶽山では、7 日に実施した現地調査で火口列からの噴煙活動を確認した。地震活動は低下した状態で経過しているが、昨年（2014 年）8 月以前の状況には戻っていない。御嶽山の火山活動は低下した状態が続く、昨年 10 月以降噴火が発生していないことから、昨年 9 月 27 日と同程度の噴火の可能性は低下していると考えられる。一方、火口列からの噴煙活動や地震活動が続いていることから、昨年 9 月 27 日より規模の小さな噴火が今後も突発的に発生する可能性は否定できない。

火口から概ね 1 km の範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石に警戒が必要である。

箱根山では、大涌谷で 7 月 1 日に発生した噴火以降、噴火は観測されていない。

火山性地震は少ない状態で経過している。GNSS 連続観測でみられていた箱根山を挟む基線での伸びは 8 月下旬頃から停滞している。

地震活動には引き続き低下傾向がみられるものの、4 月の活動活発化以前の程度に戻るまでは、引き続き大涌谷周辺の火口や噴気孔での小規模な噴火の可能性があると考えられる。また、噴気活動も緩やかな低下傾向がみられるものの活発な状態である。

大涌谷周辺の想定火口域では、小規模な噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石に警戒が必要である。

霧島山（新燃岳）では、火口直下を震源とする火山性地震が時々発生した。

GNSS 観測によると、新燃岳の北西数 km の地下深くにあると考えられるマグマだまりの膨張を示す地殻変動は、2015 年 1 月頃から停滞している。一方、新燃岳周辺の一部の基線では、わずかに伸びの傾向がみられる。

火口から概ね 1 km の範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石に警戒が必要である。

諏訪之瀬島の御岳火口では、2 日と 13 日及び 31 日に噴火が発生した。

今後も火口周辺に影響を及ぼす程度の噴火が発生すると予想されるので、火口から概ね 1 km の範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石に警戒が必要である。

表 1 10 月 31 日現在の火山現象に関する特別警報・警報・予報等の発表状況
 （※印のついた火山は火山現象に関する海上警報も発表中）

特別警報・ 警報・予報	噴火警戒レベル 及びキーワード	該当火山
噴火警報	レベル 5（避難）	口永良部島※
火口周辺警報	レベル 3（入山規制）	阿蘇山、桜島
	入山危険	西之島※
	レベル 2（火口周辺規制）	雌阿寒岳、吾妻山、草津白根山、浅間山、御嶽山、箱根山、霧島山（新燃岳）、諏訪之瀬島
	火口周辺危険	硫黄島※
噴火警報（周辺海域）	周辺海域警戒	福德岡ノ場※
噴火予報	レベル 1（活火山であることに留意）	十勝岳、樽前山、倶多楽、有珠山、北海道駒ヶ岳、秋田焼山、岩手山、秋田駒ヶ岳、安達太良山、磐梯山、那須岳、新潟焼山、焼岳、白山、富士山、伊豆東部火山群、伊豆大島、三宅島、九重山、雲仙岳、霧島山（御鉢）、薩摩硫黄島
	活火山であることに留意	上記以外の活火山

※噴火警戒レベルは、その活用が地域防災計画等で予め定められており、レベル毎の防災対応がキーワードで示されている。



図 1 10 月 31 日現在、火山現象に関する特別警報、警報及び火山現象に関する海上警報発表中の火山